AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学学術情報センターだより 第 49 号

# 「文学井戸」に落っこちる

大西　寿明

海外での図書館体験や研究について何か書けるだろうか。そう考えて記憶を手繰ってみると、思い浮かぶのはくだらないことばかりだ。たとえば、海外では良くある光景だが、館内でパソコンを使っている学生は用があっていっとき席を立つ際、周りの人に置いていくパソコンを見ていてくれるように頼む。ある日のこと、私が勉強しているとイギリス人学生が荷物を見ていてくれるように頼んできた。毎度のことなので条件反射でオーケーと答えた。しばらくして、ふと彼の荷物が気になったのでそちらに目を向けると、それはただの馬鹿でかい鉄アレイだった、とか。

私の海外での図書館体験など、万事がこの程度である。何か為になることが書ける気がしない。留学先のロンドン大学クイーン・メアリー校の図書館では、毎日ネズミが運動会をやっていたなどと書いたところで誰が読むというのか。ゆえに恥ずかしながら、自分と文学について書こうと思う。

文学との出会いは、高校２年生の頃、くも膜下出血で集中治療室に入った祖母の奇跡的な回復を祈る関係者待合室で、J・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』を読んだことだったと思う。今思い返せば、それはある意味で現実からの逃避のためだったかもしれないが、同時に繭に包まれたかのような私の「幼さ」がライ麦畑の縁から落っこちていくのをなんとか捕まえようとする、切なる願いのようなものであったかもしれない。いずれにせよ、文学を生涯の生業とすることを決めた者にとって、１７歳からのスタートは遅きに失した感が否めない。だが、だからこそ、尾崎豊ほど大人ではないものの、片田舎の１７歳の多感な青年にとって、「ここではない、どこか」の物語が自分の人生に寄り添うものでありうると知った時の衝撃は凄まじいものであったようだ。

私の高校は２年生になると理系コース、文系コースと別れることになっていた。とくにどちらにも興味のなかった私は、男子は理系、女子は文系というクラスの雰囲気に流されて、理系コースに進み、卒業まで物理、化学をやる羽目になる。しばらくして小説を読むことの楽しさを知った私にとって、ここからの高校生活は苦痛以外の何物でもなかった。３年生になり、思い切って「文転」を宣言したとき、有り難くも担任から「脱落者」の烙印を頂戴した。自分の進む道を決めただけなのに、なぜ「脱落」したことになるのだろうか。（悲しいことにこの「脱落感」は、博士論文を書き、最初の就職を決めた時まで常に付き纏った。）

コース変更ができなかったため、物理と化学の教員に赤点だけは勘弁してくれと拝み倒し、なんとか卒業させてもらう。一年の浪人は避けられなかったものの、英語の成績だけは他よりも良かったので、英語の配点が高い立教大学の英米文学科に自然と落ち着いた。

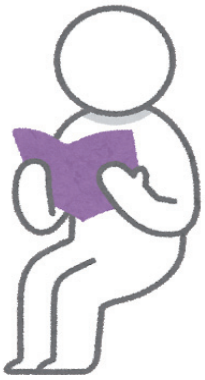
この頃に一心不乱に読んでいたのが村上春樹だった。大学生になれば自分も海にビール缶を投げ込み、警官と揉め、パスタを茹でる合間に読書し、女の子の会話に「やれやれ」だの「素敵だ」などと相槌を打つ魅惑的な４年間を過ごせるものと思っていた。もっとも２０００年代の大学にそんな詩情など残っていなかったのだけれども。だが、村上春樹の小説に幾ばくかの教訓があるとしたら、私の人生にとって重要であったのは、彼が繰り返し描く「井戸」のイメージであったかもしれない。そしてその井戸のイメージは、私の中で図書館と結びつき、仄暗い館内で、木の椅子に腰掛け、お尻の痛さと戦いながら、一人孤独に本を読んでいた自分自身の記憶へと繋がっていく。

大学生になった私は、都内にある大学に片道２時間かけて通っていた。幸いなことに大学生活で幾人かの気の置けない友人ができた。彼らは皆遠方から東京に出て来た人たちだった。沖縄、鹿児島、大分、兵庫、新潟。なぜこんなことになったのかはわからないが、とにかく関東出身は私一人だった。学期中は毎日が楽しかった。しかし、大学が長期休暇に入ると彼らは皆一斉に地元に帰省してしまい、途方に暮れたものである。大都会東京での華の大学生活、私は誰と遊んだらいいのか。高校の３年間で勉学への興味を失った私は、浪人生活を経て、何か一つのことをしっかりと勉強したいと一念発起し、結果的に英文学にのめりこみ、早くから大学院進学を希望していた。長期休暇に遊び相手のいなかった私は、家庭教師のアルバイトの傍、毎日小田急線に乗って大学図書館に通った。読まねばならぬ本は山ほどあったが、最初に手にとったのがイーヴリン・ウォーの『ブライヅヘッドふたたび』であった。

この小説との出会いは散文的なもので、ある留学体験記にあった、イギリスの大学システムについて知りたければウォーの『ブライヅヘッドふたたび』を読めばいい、という一文と出くわしたのがきっかけである。この小説を読んだところで、酒の飲み方や大学での堕落の仕方については学ぶことができるかもしれないが、イギリスの大学システムについては塵ほども学べなかった。だが、この小説は不思議と心に残り続けた。この小説がなぜ自分にとって大切なのか、この問いに答えを見つけることが大学１年生から博士論文を書くまでの私の研究テーマの中心にあったように思う。文学について研究することがどうしても自分と向き合うことと切り離せない。知的好奇心よりも親近感が勝ってしまう対象は、研究にとって良いことではないかもしれない。自分と向き合うことが井戸に落ちることであるならば、井戸に落ちて、深く潜って、結果何も見つからない可能性もあるからだ。知の大海と言うように、世界は広く捉えた方がいいのかもしれない。だが、私にとって知に結びつく文学や図書館はいつも井戸のイメージなのである。

今、神戸にいるのは春樹の呪縛だろうか。そういえば、いつの間にかワタナベトオルの年齢に近づいていた。

（おおにし　としあき　英米学科准教授）



著書紹介　『マーク・ザッカーバーグの英語：フェイスブックを創った男』

# 名演説から学ぶもの

野村　和宏

『マーク・ザッカーバーグの英語：フェイスブックを創った男』
マーク・ザッカーバーグ（述）
野村 和宏 ( 解説 ), 倉本 圭造 ( 解説 )
小宮 徹 ( 訳 ), 山口 西夏 ( 訳 )
コスモピア編集部 ( 編 )
コスモピア
2017 年 10 月発行
図書館所蔵
N837.7-88

この本はフェイスブック創業者のマーク・ザッカーバーグ氏によるハーバード大学卒業式スピーチや開発者会議での基調講演などを収めたもので、私は卒業式スピーチの解説を担当しました。

アメリカの大学の卒業式祝辞といえば、2005 年にスタンフォード大学卒業式で行われたスティーブ・ジョブズ氏のスピーチが有名ですが、毎年どの大学が誰を招聘するかが話題になります。2007 年には東の名門ハーバード大学がビル・ゲイツ氏を招きました。その日は、本学の英語教育学専攻の先生方と一緒にボストンにある S.I.T. での短期集中研修を終え、日本に帰国する日でした。ボストンの町はハーバード大学卒業式とビル・ゲイツ氏が来るということで華やいだ雰囲気であったことを覚えています。そのちょうど 10 年後となる 2017 年、同じくハーバード大学の卒業式で、ジョブズ氏とゲイツ氏の 2 人に影響を受けたザッカーバーグ氏がスピーチを行いました。今はフェイスブックの個人情報流出問題で、その対応に追われているザッカーバーグ氏ですが、この 2017 年の卒業式スピーチは力強いメッセージを伝える圧巻の演説となりました。

これまでアメリカ大統領を始めとするさまざまなスピーチ研究を行ってきました。内容の構成、語彙の選択、レトリックの技法、声やジェスチャー、デリバリー、聴衆参加への仕掛けなど、スピーチ分析にはさまざまな観点からのアプローチが可能です。ザッカーバーグ氏のスピーチも大変興味深いものとなっています。

ザッカーバーグ氏がスピーチを行った 2017 年 5 月 25 日はあいにくの雨でしたが、レインコートを着たり傘をさしたりして会場に集った多くの聴衆に対して 30 分のスピーチを行いました。原稿の文字数としては約 4,000 語で、一分間あたり平均 130 語の速度となります。こうした式典でのスピーチとしては速いのですが、明晰な調音に支えられた聴きやすい英語となっています。

失敗談や自虐ネタも交え、常に聴衆を意識した語りは親近感を感じさせ、目標を持つことや小さいことからでも自ら行動していく大切さを力強く訴えています。さりげなく埋め込まれたレトリックの技法も見事ですが、何より驚いたのはそのデリバリーでした。

卒業式のスピーチという失敗の許されないスピーチでは、原稿を用意しながらも聴衆とアイコンタクトをするためにプロンプターを使用することがよくありますが、ザッカーバーグ氏は使用していません。それにもかかわらずこの 30 分あまりの間、数回、手元に目を落として次に来る話の展開を確認していると思われる他は、ほとんど目を落とさずに聴衆に向かって話し続けたのです。細かな数字や具体的な人名を言う場合でさえも原稿に目を落とすことがありません。自分の伝えるべき内容が完璧に頭の中に入っている証で、これは高度に洗練された会話的スタイル (heightened conversational style) というものです。英語による自然な会話的要素をもつスピーチ発表のスタイルとして、われわれ英語学習者はここから学ぶことが多くあります。

（のむら　かずひろ　英米学科教授）

秋の図書館イベント

# 第 8 回選書ツアーを開催しました

10 月 17 日（水曜）の午後、丸善ジュンク堂書店三宮店にて学生選書ツアーを開催しました。第 8 回となった今年の参加人数は 7 人。学年も学部も見事にバラバラで、選書本のジャンルも多種多様となりました。男子学生が 4 名で女子学生 3 名の数を上回ったのも、外大の学生の男女比率からいくと中々に面白い結果と言えるのではないでしょうか。

当日、8 月にリニューアルされた丸善ジュンク堂書店三宮店（センター街に面したお店）の 5 階に到着。 2 ～ 4 階とは違った雰囲気で、天井が高く書架も高い、それこそ図書館のようなフロアとなっていました。定刻通りに集まった学生たちは説明が終わるや否や各自フロアへと散っていき、残された職員はさて今年はどんな本が選ばれてくるかと待つばかりです。

時折カメラを携えて巡回してみると、学生たちは目の前にずらりと並ぶ本とにらめっこ。限られた予算内にどう収めるか頭を抱える学生には少し申し訳ないと思いつつ、こうも真剣に悩んでもらえると図書館職員としては嬉しいなぁとも思ったり。書店内に設置される商品検索用の端末の操作も慣れたもので、書店員に聞くより先に自分で検索する姿はさすがスマートフォンと共に育った世代。

学生たちは 30 分も経つと本を抱え、5 階に帰ってきました。ここで、職員による本へのチェックが始まります。外大に同じ本がないか、金額はいくらかなど、確認が済むと学生たちはカゴを抱えてまたフロアへと舞い戻ることができます。7 人がそれぞれに本を抱えてやってくるので、2 人の職員と 1 人の書店員はてんてこ舞いです。

2 時間はあっという間に過ぎ、選ばれた本も 100 冊を超えるまでになっていました。満足した様子で帰っていく学生たちを 1 人また 1 人と見送ったあと、職員も外大へと帰ります。

後日書店より届けられた選書本を改めて眺めてみると、外大図書館の本としては珍しいような種類のものも目立ちました。文学の分野のもの、小説やエッセイ等が多いのは毎年のことですが、AI 等コンピュータに関するものが多かったのには驚きました。選書にも各々の色が表れ、一つの分野に特化して選書する学生もいれば、各ジャンルから一冊ずつといったようなバランスの取れた選び方をする学生もいます。そうして全く別々の選び方をされたにもかかわらず、揃った本はみなどこかしらに若さを感じます。書店で自由に本を選んでいい

と言われたら、学生と同じようにフレッシュな選書ができるのでしょうか。選書ツアー職員編もぜひやってみたいものです。

実は選書ツアーのお楽しみはツアー当日だけではなく、一か月ほど後に行われる茶話会もその一つです。どうしてその本を選んだのか、などなど、自らが選書した本を前に話に花を咲かせます。残念ながら学術情報センターだよりの発行日と茶話会の日程の関係でその様子をここに記すことはできないのですが、きっと盛り上がることでしょう。

さて、第 8 回選書ツアーの様子を長々と記してきましたが、その選書本が図書館で展示されます。12 月上旬から 3 月頃まで、新着図書コーナーの一角にて学生たちの手書きポップと共に紹介されています。学生たちが選びに選び抜いた 100 冊余りは一見の価値あり。通常の資料と同じく貸出可能ですのでお早めに足をお運びください。

（西村）

～教えて！図書館～

## 「本がどこにあるか分かりません…」

図書館のホームページ上にある蔵書検索（OPAC）で調べると、本は確かにあるはずなのに、館内を探してもちっとも見つからない・・・。そんな時おさえてほしいポイントを一つご紹介します。

図書館内のパソコンか、スマートフォンなどでまず図書館の蔵書検索ページ（OPAC）を開きます。そして目当ての本を検索して出てきたページで見てほしいのが、「ロケーション」の欄です。書誌欄の下、所蔵館一覧という文字の下の項目の、左から二番目に位置しています。

| 所在 | ロケーション |
|---|---|
| 外大図書館 | 閲覧室 |

このロケーションは、本がどのフロアにあるかを示しています。図書館のフロアは大きく四つ。①閲覧室　②開架書庫　③書庫２F　④書庫３F　に分かれます。この中で利用者全員が自由に出入りできるのは①閲覧室と②開架書庫です。どちらも１階に位置しています。

閲覧室は、図書館の入口から直接広がる書架が立ち並ぶ部屋全体の事を指します。おそらく場

所が分かりにくいのが開架書庫。開架書庫の入口は、閲覧室の奥、第２閲覧室へと上がる階段の横にあります。床面の素材等が変わるので、閲覧室とは少し雰囲気が異なります。こちらの開架書庫には、主に古い本や利用が少ない本が所蔵されています。本の分野等では閲覧室と開架書庫は分けていないので、どんな本でも開架書庫に所蔵される可能性があります。この開架書庫の本は誰でも貸出可能です。

| 所在 | ロケーション |
|---|---|
| 外大図書館 | 開架書庫 |

③書庫２F ④書庫３F の本を利用する場合は、教員・院生の方を除いて「資料請求票」をカウンターに提出していただく必要があります。

簡単にご紹介させていただきましたが、もしお探しの本が見つからないことがあればお気軽に図書館職員にお尋ねください。

## 図書館日誌 《2018 年 7 月～ 2018 年 11 月》

2018 年

6.4-7.28　展示「司書のおすすめ D」第 41 回

7.16-8.2　2018 年度第 2 回 Re ユース

7.22/29　試験期日曜開館

7 月のゼミガイダンス　8 回実施

8.5/19　オープンキャンパス

（専攻言語の図書展示、司書による書庫見学ツアー）

8.20-27　蔵書点検

8 月のゼミガイダンス　1 回実施

10.1-11.24　展示「司書のおすすめ D」第 42 回

10.17　第 8 回選書ツアー

11.6/7　トライやるウィーク（1 校 2 名受入）

11.12-12.13　図書館アンケート実施

11.28　選書ツアー茶話会

AD ALTIORA SEMPER 神戸市外国語大学学術情報センターだより
第 49 号　ISSN　0919-2336
「AD ALTIORA SEMPER」とはラテン語で「常により高きを求めて」という意味です
編集・発行：神戸市外国語大学学術情報センター
〒 651-2187 神戸市西区学園東町 9 丁目 1
TEL：078-794-8151 / FAX：078-797-2257
URL：http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/
2018 年 11 月 30 日発行　発行責任者：センター長　岡本崇男